日本経済新聞（夕刊）
2012年（平成24年）4月16日（月曜日）
夕刊文化 14

こころの玉手箱

文化人類学者
須藤 健一

1

九谷焼の徳利

父の面影、苦みとともに

腹をわって父と話した記憶が薄い。父は怖くてどこか煙たい存在だった。

野山を駆け回り、夏は海に潜って勉強をしない私に父は長いキセルで頭をたたきながら宿題を教えた。

家は新潟県佐渡島に続く地主で、戦後の農地改革で9割以上を失った。小学校の教師だった父は「自分の代で途絶えては先祖に顔向けできない」と教職を辞めた。幼い私の将来を考えてのことでもあった。

農業に専念して家の周りの田を改良し、2倍以上の約2万平方メートルに増やした。奥山に朱鷺が餌場にする田があり、そこへ歩いて通う村人のために、自分の山を削ってまで道をつけるような父だった。

私は5人兄弟の真ん中。姉2人、妹2人に挟まれた唯一の男だ。当然、私こそ父が守り広げた農地を継ぐもの、と周囲はみていた。

高校の進路で「農業高校はどうだ」と水を向ける父を「歴史の教師になりたいから」とかわし、佐渡高校への進学を認めさせた。自ら教員経験があったこともあり、目こぼししてくれたのだろう。

ところが大学に進むと構造主義やフィールドワークなど人類学の理論や手法に魅せられる。今度は「教師の資格が取りやすいので」とかたって大学院に進んだ。そして最後はとうとう歴史の教師とは畑違いの文化人類学の研究者として人生を歩み始めた。

父の期待に反した進路をとることに、負い目を感じた。父はブンカジンルイガクという耳慣れない学問を、頭では理解してもどこか懐疑的にみており、「健一はいつ戻ってくるのか」と周囲にこぼしていた。

地主時代の家の羽振りの良さを物語るものは、いまやわずか。酒器や蒔絵膳などはその名残をとどめる数少ない品だ。この徳利は鮮やかな絵付けの九谷焼で、幕末～明治初期のものだろう。母によれば、こうした徳利は蔵に数十本あったが、酔った父が気前よく人に分け与えたため、ほとんど消えてしまった。

この徳利を前にすると、なぜか飲んでいるときはいつも上機嫌だった父の笑顔と、その期待にそえなかった苦みがよみがえる。

晩年近く、私の研究活動を報じた記事を、父が新聞で目にする機会があった。「あいつも一人前になったか」とつぶやいたらしい。心を開いてくれたのだろうか。真意は聞きそびれた。

この徳利を前にすると、父を思い出す

すどう・けんいち　1946年新潟県佐渡島出身。69年埼玉大卒業、75年東京都立大大学院博士課程満期退学。国立民族学博物館助教授や神戸大教授などを経て、2009年から同博物館館長。主著に「オセアニアの人類学―海外移住・民主化・伝統の政治」ほか。